

静岡大学キャンパスミュージアム ニュースレター

Newsletter No.19
March 2018



企画展：「The 標本学！」

目次

-
- | | |
|------------------------------------|----------------------------|
| ● 2017 年度企画展「The 標本学！」 | キャンパスミュージアム館長・理学部 塚越哲 …… 2 |
| ● 旧制静岡高等学校関係資料の公開状況について | 人文社会科学部 戸部健 …… 4 |
| ● 地域連携による回遊型美術展『めぐるリアート静岡』について | 教育学領域・地域創造学環担当 白井嘉尚 …… 5 |
| ● 2017 年度 静岡キャンパスミュージアム公開講座 | 学術情報部研究協力課 木下佳明 …… 6 |
| ● 大学博物館等協議会第 20 回大会 (in 山形大学) 参加報告 | 人文社会科学部 篠原和大 …… 7 |
| ● 2017 年度キャンパスミュージアム活動報告 | ワーキンググループ …… 8 |

◆報告◆

2017 年度企画展「The 標本学！」

キャンパスミュージアム館長・理学部 塚越 哲

2017 年度キャンパスミュージアム企画展は、「The 標本学！」と題して、2017 年 11 月 13 日より開催された（表紙写真）。11 月 24 日までは毎日 10:00-16:00 の時間帯で、それ以降は、12 月の通常授業が終了するまでの定例日（火・木曜日の 12:00-15:00）にも予定を延長して開催した。また、大学祭期間中の 11 月 18 日と 19 日には、標本作成の体験イベントも併せて開催された（写真 1）。



写真 1. 企画展「The 標本学！」のポスターとチラシのデザイン。

本企画展の趣旨は、博物館の中心を形成するモノである標本について、その学問的役割やヒトの科学的思考とのつながりを示すことを趣旨とした。展示序文にも書いたことであるが、標本とは大きく 2 つの役割がある。一つは学問的リファレンス、学問の再現性の保証であり、また別の観点では、自然界全体を類推する思考の礎である。本企画展では、このような標本の役割が理解されるよう、また標本が本学の研究・教育に大きな役割を果たしていることが表現できるよう努めた。本企画展には、理学、教育、人文社会、そして技術部からと、静岡キャン

パスから広く協賛者を得ることができ、キャンパスミュージアムらしい展示となった。

展示室としてはミュージアム内の実習室のみを使用し、入り口から実習室までを標本作成の体験イベントのスペースとして確保した。入り口には展示序文として本企画展の趣旨を掲載し、展示室中央にはタイプ標本を置き、時計回りに順路を作って、石器・須恵器、古生代三葉虫化石、新生代貝類化石、現生貝類とその捕食痕、微小動物（クマムシ、貝形虫）の順にコーナーを設けた。また大型スクリーンには展示に関連する写真を解説付きで常時スライド上映して情報を補った。



写真 2. 手前中央が石器須恵器コーナー、左が古生代三葉虫化石コーナー、右が新生代貝類コーナー。

タイプ標本は種を記載する際に、その学名を保証するために国際規約で定められた標本であり、保管義務を負う最重要標本であるといえる。今回はスウェーデン自然史博物館から借用した三葉虫 *Pompeckia minor* Warburg, 1925 (標本番号 RM Ar11426) と、本キャンパスミュージアム所蔵の貝形虫 *Cytheroidea ikayai* Nakao & Tsukagoshi, 2002 (標本番号 SUM-CO-1196) の 2 標本をガラスショーケースに入れ、タイプ標本の意義の解説とともに展示した。

石器・須恵器コーナーでは、新潟県真人原遺跡から発掘された黒曜石製の石器、古墳時代の須恵器が展示され、考古学の立場から見た標本の意義や、展示資料の考古学的解説がなされた。古生代三葉虫化石コーナーでは、スウェーデン産の三葉虫標本と三葉虫が作った這い痕（生痕）標本とともに、化石研究者から見た標本のとらえ方が解説された。新生代貝類化石コーナーでは、静岡県掛

川層群産化石が化石を取り出す前の母岩とともに展示され、とらえられた化石が深海生物群集であることや、堆積当時の深海生物の多様性研究につながることも併せて解説された。

現生貝類とその捕食痕コーナーでは、1000個近い標本を陳列して貝類同士の捕食-被食関係や日本と近隣海域のハマグリ の形態、分布、遺伝子の比較など、今進んでいる研究に密接に関連して解説された(写真3)。微小動物コーナーでは、個々の生物の特性を解説するとともに、生きたクマムシが活動する様子を実体顕微鏡で観察したり、貝形虫類のステレオ写真を観賞したりする展示がなされた(表紙写真)。



写真3. 手前が新生代貝類コーナー、中央が現生貝類とその捕食痕コーナー、奥が生きたクマムシの観察展示コーナー。

今回の企画展の大きな特色の一つは来館者の「体験」を取り入れたことである。単に展示を眺めるだけでなく、今回は展示のテーマである標本の作成を来館者に体験してもらうことを企画した。標本作成体験企画は二つあり、一つはメダカの骨格標本を作成するものであり、もう一つは三葉虫のレプリカ標本を作成するものである。この企画には親子連れの参加者が間断なく訪れて大変な賑わいとなり、自ら作成した標本を記念として持ち帰っていった。展示だけでは子供連れで入りにくい雰囲気や悪い意味で壊すことができたと思う。このような取り



写真4. メダカの透明骨格標本作成の体験イベント。



写真5. 三葉虫のレプリカ標本作成の体験イベント。

組みが、大学博物館と市民社会との敷居を低くすることが実証されたともいえる。

本企画展では、652名の来場者を迎えることができた。アンケートには84の回答があった。内訳をみると、性別では男性が女性をやや上回るがほぼ同等、年齢では20代が目立って多かった。職業としては社会人、次いで小学生を含む学生、居住地は静岡市内が半数近くを占めた。自由記入欄でも様々な意見が書き込まれ、おおむね良好な意見で占められた。特に生きたクマムシと貝の捕食痕の展示は多くの来館者の関心を引いたようである。

今回の展示については、昨年のようにマスコミがこの企画の取材に訪れることがなかったのは残念である。こちらから先方に取材を働きかけたが、反応は芳しくなかった。しかし結果的には来館者数は昨年を上回り、学生をはじめ、若い世代の来館が非常に多かったことは、昨年とは違った収穫であった。昨年のような社会性を持った展示とは正反対の今回のような企画を試すことは意義があった。

来期は人文・考古系の企画展が予定されている。

◆解説◆

旧制静岡高等学校関係資料の公開状況について

人文社会科学部 戸部健

人文社会科学部には、旧制静岡高等学校（以下、旧制静岡高とする）に縁のある資料が多く所蔵されている。旧制静岡高とは現在の人文社会科学部と理学部の前身であり、1922年8月に静岡市大岩（現在の城北公園）に設置された。旧制静岡高は、他の旧制高校と同様、いわゆる帝国大学入学のための予備教育機関として、戦前におけるエリート教育の一角を担っていた。卒業生のなかにはその後政治・行政・経済・文化などの分野で活躍した者も少なくない。

旧制静岡高は第二次大戦中に空襲の被害をあまり受けなかった。そのため、その建物は基本的に戦後も残された。1949年に旧制静岡高などの後継として静岡大学が誕生しても、建物は引き続き校舎として使用された。ただ、残念ながら68年に大学が静岡市大谷に移転した後、大岩の校舎は取り壊されてしまった。現在でも校舎が残されている旧制五高（現：熊本大学）や旧制松本高校（現：旧制高等学校記念館）などの例を見ると、旧制静岡高の校舎が保存されなかったことは実に悔やまれるところである。

さて、そのような経緯から旧制静岡高の建物自体はなくなってしまったが、他方で同校が所蔵していた資料は上述のように今でも人文社会科学部に多く残されている。その大半は総務や教務に関する文書資料であるが、校旗や始業の鐘、寮の食器などのような物品や、学友会に関わる資料、さらに写真資料なども含まれており、どれも貴重である。詳しくは拙稿「旧制静岡高等学校関係資料の整理作業に関する経過報告」（『地域研究』創刊号、2010年）をご覧ください（静岡大学附属図書館のリポジトリからも閲覧可能）。2009年以来、人文（社会科）学部大学アーカイヴズ・プロジェクトがそれら資料の整理・公開に向けた活動をしており、2017年以降その作業は人文社会科学部大学アーカイヴズ委員会に受け継がれている（以下、両者を合せて大学アーカイヴズ委員会とする）。その活動のうち、現時点での資料の公開状況について簡単に紹介したい。

(1) 写真帳の刊行

大学アーカイヴズ委員会では、近年、所蔵する写真の公開を進めている。2015年度には、旧制静岡高の文化祭や修学旅行、寮生活などのサムネイル画像と目録を収めた『旧制静岡高等学校関係写真目録』を、続く16年度には、校舎の姿や授業風景、卒業生の集合写真などを収録した『旧制静岡高等学校関係写真帳』を刊行した。そして、17年度には、

取り壊し間際と思われる時期の校舎を捉えた写真の一部を『静岡大学人文社会科学部所蔵旧制静岡高等学校・静岡大学大岩校舎関係写真帳』第1集として発刊することになっている。残りの写真についても今後順次公表していく予定である。これら写真帳に関心をお持ちの方は筆者までご連絡いただきたい。

(2) 人文社会科学部A棟ロビーなどでの展示活動

2010年以降、人文社会科学部A棟ロビーにおいて旧制静岡高資料の展示を行っている。これまでの展示テーマは以下のとおりである。

- ・「開校直後の旧制静岡高等学校」（2010年10月～）
- ・「創立十周年の旧制静岡高等学校」（11年2月～）
- ・「仰秀寮のあゆみ（1）」（11年10月～）
- ・「戦争と旧制静岡高等学校（1）」（12年7月～）
- ・「戦争と旧制静岡高等学校（2）」（14年2月～）
- ・「旧制静岡高校のスポーツ活動」（14年7月～）
- ・「旧制静岡高校の文化活動」（15年7月～）
- ・「戦争と旧制静岡高等学校（3）」（16年7月～）
- ・「旧制静岡高卒業生の横顔—松本征二と社会福祉行政—」（17年9月～ 大学資料室との共催）（※13年9月頃～14年2月は人文棟改修工事のため、展示を休止している）。

ショーケースには展示物のほかにデジタルフォトフレームも設置し、旧制静岡高関係の写真のスライドショーを行っている。また、ショーケースの横には旧制静岡高のジオラマを置き、校舎の全体像を理解しやすくしている。18年春にも展示替えを行う予定なので、引き続きご覧いただければ幸いです。

なお、12年11月にはキャンパスミュージアムにおいても企画展「写真でたどる旧制静岡高等学校のあゆみ」を開催した。その様子については本誌14号に掲載された旧稿を参照されたい。

以上、旧制静岡高関係資料の公開状況について紹介した。写真資料を中心に、ここ数年の間で同資料の存在を広く知ってもらう機会を増やすことができていると考えている。ただ、資料の大半を占める文書資料については、展示物を除けば原則公開するに至っていない。問い合わせがあった際に個別に対応しているのみである。今後、外部の方でも利用しやすい状態にしたいが、乗り越えなければならない壁も多い。目標に向かって着実に歩を進めていきたい。

◆報告◆

地域連携による回遊型美術展『めぐるりアート静岡』について

教育学領域・地域創造学環担当 白井嘉尚

美術展『めぐるりアート静岡』は、平成25年から27年にかけて実施された文化庁助成による静岡大学「アートマネジメント力育成事業」の一環、美術分野の実習として始まった。実習では展覧会の企画実施にあたる各段階を受講者に公開し参画を促すことでアートマネジメント力の育成を目指した。またそれは、「アートを媒介に、静岡の過去と現在、場と人を結ぶ術を考える」ことをテーマに、平成25年3月に静岡市内6会場で実施された展覧会『むすびじゅつ』を継承している。

文化庁による助成期間が終了した平成28年度からは、静岡市から委託された本学の研究事業として、市の「“まちは劇場”プロジェクト」における「超実験的」な試み、東静岡「アート&スポーツ/ヒロバ」を会場に加えることで新たな一步を踏み出した。同じくこれは静岡市文化振興財団および静岡県立美術館とも連携している。

美術展の企画・実施および人材育成を担う講師は、学内外の組織の枠を超えたキュレーションチームが担っている。会場は『むすびじゅつ』が切り開いたモデルを踏襲し、市内に散在する美術館や民間の文化拠点あるいは公益財団法人が管理する文化施設など、異なる特色を持つ場がスクラムを組む市内回遊型の展覧会とした。アーティストの人選にあたっては、静岡に縁があるとともに必ずしも評価が確立していない若い世代に着目し、表現行為における外的・内的な拘束にとらわれず自らのテーマや方法を追求している作家を求めた。

キュレーターとアーティストは、それぞれの立場からアートの可能性をより広い視点から見つめ直すことで、社会における新たな役割を探っている。たとえば今、土や竹や木などの素材を扱うことは、私たちをとりまく自然環境や文明のありかたへの問いを孕む。その問いは、CGによる映像作品あるいはSNSなど、最新のテクノロジーやメディアを用いた動向からも発せられる。かつてこの地の物流を担った国鉄貨物駅の跡地である「ヒロバ」に設置された車掌車ギャラリーやコンテナ・アートベース、中勘助文学記念館における造形作品と文学作品との照応、静岡県立美術館ロダン館での現代作品とロダン作品との対峙、またかつて映画街として賑わった七間町の空き店舗・村上開明堂七間町第2ビルなど、場との関係性を際立たせるサイトスペシフィックな作品群も『めぐるりアート静岡』の特色といえよう。

キュレーションチームのメンバーとして平成29年度

は、川谷承子（静岡県立美術館上席学芸員）、以倉新（静岡市美術館学芸課長）、柚木康裕（オルタナティブスペース・スノドカフェ代表）、堀切正人（常葉大学准教授）、平野雅彦（静岡大学特任教授）、名倉達了（静岡大学助教）、植松篤（静岡県立美術館主任学芸員）に参画いただいた。なお展覧会全般については静岡市文化振興課および静岡市文化振興財団、東静岡「アート&スポーツ/ヒロバ」会場に関しては静岡市企画課さらにローラースポーツパークの事業受託者H.L.N.Aとも密接に連携し、「静岡から芸術を発信する場」を創出すべく務めた。

大学授業との関係では、東静岡の「ヒロバ」は、本学地域創造学環の授業「フィールドワーク」の実習地の一つである。そのサイトが、アートとスポーツの力を活かし、幅広い層の市民に愛されるサードプレイスになるために何が必要か、腰をすえた取り組みを始めたところである。



岩野勝人《コンテナ・アートベース》、アート&スポーツ/ヒロバ
photo:遠藤幸廣



池島康輔《ダーマ》(左)、静岡県立美術館ロダン館
photo:加藤和夫

◆報告◆

2017年度 静岡大学キャンパスミュージアム公開講座

学術情報部研究協力課 木下佳明

キャンパスミュージアム公開講座は、参加者に対して静岡大学に関連する様々な資源をテーマに、学内外の教員等が講師となり、座学や現地観察をしながら、各専門分野からの解説を行うものである。今年度で8回目を教える本講座は、10月に全4回にて開催し、受講者として、下は小学生から上は60代以上まで、延人数計43名の参加があった。

昨年度から引き続き静岡大学に隣接する「ふじのくに地球環境史ミュージアム」より講師をお招きし、「土壌動物」をテーマに講義いただいた他、学内講師においては、従前より人気を博している「静大構内の植物」に加え、新たな講座として「石器の見方～石器の作り方と種類～」及び「静岡のジオダイナミクス」と題した講座を開催した。

参加した受講者は、講師の解説に真剣に耳を傾け、またメモを懸命に取る姿も見受けられた。同時に、その中で生まれた疑問に対し、1つ1つ丁寧に講師が応答していくなど、双方が一体となって本講座を盛り上げていく姿勢がそこにはあり、短い時間の中ではあったが、大変有意義な講座となった。

本年度の公開講座は、季節はずれの台風が続くなど、天候に恵まれなかったが、参加者からは、普段出来ない経験を通じて、「踏みしめる落葉の下に見えない小さな小さな虫たちがいることに驚きました。」「顕微鏡の世界がおもしろかった。」「もっと調べたい。」等の声が聞かれた。

■今年度の各回の講座の内容は以下のとおり。

第1回「静大構内の植物探訪」

- ・ 日時：2017年10月7日（土）
- ・ 講師：理学部 准教授 徳岡徹
- ・ 参加：11名



第2回「石器の見方～石器の作り方と種類～」

- ・ 日時：2017年10月14日（土）
- ・ 講師：人文社会科学部 准教授 山岡拓也
- ・ 参加：12名



第3回「静岡のジオダイナミクス」

- ・ 日時：2017年10月21日（土）
- ・ 講師：理学部 准教授 石橋秀巳
- ・ 参加：12名



第4回「身近な足もとの虫たち～土壌動物～」

- ・ 日時：2017年10月28日（土）
- ・ 講師：ふじのくに地球環境史ミュージアム 准教授 岸本年郎
- ・ 参加：8名



◆報告◆

大学博物館等協議会第20回大会（in山形大学）参加報告

人文社会科学部 篠原和夫

大学博物館等協議会第20回大会・第12回日本博物館科学会が2017年6月22日（木）・23日（金）の日程で山形大学を会場として開催された。全国の大学博物館などから100名ほどの参加があったが、静岡大学からは人文社会科学部・篠原和夫と研究協力課・木下佳明が出席した。山形はサクランボの出荷が最盛期を迎えており、駅の協議会の看板前も初夏の日差しと美しい赤い粒が放つ光のコントラストで溢れていた。

1日目の大学博物館等協議会は「大学収蔵資料の可能性を引き出す」をテーマにシンポジウムが行われた。三上喜孝氏は山形大学で発見された「高句麗広開土王碑」拓本から全国に残された同種の拓本を比較分析し、歴史研究上の成果を上げたことやそこから企画展や公開講演会などを通して広く普及・活用する機会を得たことから、「大学収蔵資料を出発点とした新たな研究方法の開拓」という得難い経験をしたことを報告した。他にも九州大学の移転に伴い発見された資料の報告などが行われ、大学収蔵資料を公開・活用していくことの意義と可能性が議論された。事務会議を経た後の総会では会の運営以外に文化遺産防災ネットワークや改正が予定されている文化財保護法の問題などが話題となった。

2日目の博物館科学会では参加した各大学博物館からの研究発表が行われたが、各発表は、〈教育〉学生や市民を対象とした展示やワークショップ、〈情報〉博物館資料のアーカイブ、〈研究〉博物館資料を分析・活用する技術、〈地域と社会連携〉地域と大学の資料を横断的に活用した取り組み、といった形でカテ



図1 静岡大のポスター

ゴリ別に順に報告・質疑が行われたため、関連したまとまった議論が生まれるなど有意義に進められた。特に各地方の大学博物館は、地域とのかかわりで大学に残された資料の活用や地域の特色に積極的にかかわって連携事業を展開する事例など、参考になる報告が多かった。このほかにもポスターセッションやリーフレットの配布などで各博物館の取り組みが紹介され、参考になった。静大でも図1のポスターを作成して最近の取り組みを紹介した。

発表の後は、参加者で市内の山形城跡の発掘調査・整備の状況を見学し、市の担当の調査員の方から説明を受けた。駿府城によく似た平地の城であるが、市内の各所にも城に関する遺構が残されており、歴史遺産としての価値と可能性がよく分かった。

山形大学の附属博物館は昭和初期に山形県師範学校に併設された「県郷土室」まで遡る伝統を持つという。1952年には「博物館相当施設」の指定を受けており、近年の耐震改修などに伴って、2015年11月にキャンパス正門前の1号館にリニューアルオープンした。ゆったりとした展示スペースに、師範学校からの大学史資料、山形の自然史資料・標本、歴代の特色ある研究者の紹介、地域の考古資料や学内に残されていた山形藩関係の資料など特徴のある資料が展示されていた（図2）。会の冒頭で山形大学では年間8億円の教職員の出張旅費が用意され、広く外部とつながることから大学の発展を企図していることが紹介された。地方の大学の活力と特色とはどのように生み出されるのだろうか、などとなれないことを考えながら帰路についた。



図2 山形大学附属博物館の大学史の展示

◆報告◆

2017 年度キャンパスミュージアム活動報告

ワーキンググループ

展示室の公開

通常開館として、通常授業期間中（4月～7月及び10月～1月）の火曜日と木曜日に3時間（12:00～15:00）の一般公開を行った。一般公開日は57日間であった。また、一般公開日とは別に、企画展開催中（11月13日～24日）に特別公開（10:00～16:00）を行った。公開日以外の来訪者に対してWGのメンバー等が対応し随時公開を行った。通常開館中の来館者数は172人（企画展開催中の来館者を合わせると824人）であった。

企画展「The 標本学！」

キャンパスミュージアム支援員及び本学標本学関係の教員・技術職員の協力のもと、さまざまな種類の標本の展示を行なった。また、静大祭と同時開催となった、11月18日（土）・19日（日）には、「透明骨格標本の作製」・「化石のレプリカの作製」の2種類の体験イベントを開催した。

・会期：11月13日（月）～24日（金）10:00～16:00（12日間）

12月の通常授業が終了するまでの定例開館日（火・木曜日の12:00-15:00）

も期間を延長し開催

・来場者数：652名

大学博物館等協議会

6月22日（木）・6月23日（金）、山形大学小白川キャンパスにおいて大学博物館等協議会2017年度大会（第12回博物科学会）が開催された。同大会には、篠原和大・キャンパスミュージアム支援員（人文社会科学部教授）および事務職員1名が出席した。博物科学会では、2016

年度の静岡大学キャンパスミュージアムの活動を報告するポスター発表を行った。

公開講座

2016年度に引き続き、静岡キャンパスの植物や生物等を屋外で自然観察などをおこなう内容の公開講座を10月に下記のとおり実施した。

静岡大学公開講座 2017

第1回 10月7日（土）

「大学構内の植物探訪」

講師：理学部准教授・徳岡 徹（環境応答学）

第2回 10月14日（土）

「石器の見方～石器の作り方と種類～」

講師：人文社会科学部准教授・山岡拓也（考古学）

第3回 10月21日（土）

「静岡のジオダイナミクス」

講師：理学部准教授・石橋秀巳（地球科学）

第4回 10月28日（土）

「身近な足もとの虫たち～土壌動物～」

講師：ふじのくに地球環境史ミュージアム准教授・岸本年郎（昆虫分類学）

・4日間で延べ43名の参加があった。

学術資料の登録・貸出など

ガムラン楽器、及び鉱物標本等を学内外の求めに応じて貸し出した。

静岡大学キャンパスミュージアム ニュースレター No.19

■発行日 2018年3月31日

■発行 静岡大学キャンパスミュージアム

■編集担当 宮澤 俊義（技術部）

■連絡先 〒422-8529 静岡市駿河区大谷836 静岡大学学術情報部研究協力課

☎054-238-4316 FAX 054-238-4312

■印刷 株式会社三創